

指導概要

(一) 教材

- (1) 本教材の取扱は、必ず前教材僕の子馬と連絡を保たなければならない。即ち此の母馬は北斗の母馬であり、子馬は北斗である。従つて此の詩の作者も新一としても差支あるまい。
- (2) 次第に讀みを深めて行つて、其の中心語句に留意させて詩の持つ心持氣分を玩味させて欲しい。
一節、沼の岸、夏の夕の柳かけ。二節、母が番して、ゆつくりゆつくり水を飲む。三節、圓く廣がる水の輪、いくつも出ては消えるたび。四節、水にうつつた三日月、ゆらく見えたりかくれたり。五節、柳のかけが暮れて行く。

- (3) 各節終りの句と次の節の始めの句との連結に留意させるがよい。夏の夕の柳かけ↓母が番して↓ゆつくりゆつくり水を飲む↓圓く廣がる水の輪↓いくつも出ては消えるたび↓水にうつつた三日月↓母馬子馬。

- (4) 話し合ひにより、或は指導者によつて活寫的に模寫的に其の實景を描き出すやうに取扱ひたいものである。

- (5) 文字も僅二字の新出であり、語句もさまで難しいものはない。故に詩の玩味に力を入れるがよい。

(二) 挿畫

沼の岸の柳のかけで夕の涼風に浴しながら子馬が水を飲んでゐる。母馬が番をしてゐる。出ては消える水の輪に三日月がゆらく見えかくれする。今恰度三日月が見えた所、詩とやらでやさしく美しく静かな光景である。

(三) 準備

掛圖。

第二十二 秋のおとづれ

一 要旨

八月の末から二百十日頃への秋立つ季節の文學的敘述である。秋が來た、秋は虫の聲から始る。今までの夏の強烈な刺激から、靜かな秋の氣分に移つて行く心を読みとらせ、新秋の自然に眼を向けさせて、虫の音と色や匂の季節の上に秋のおとづれを感じさせ自然觀照の態度を培ふ。

二 指導観

(一) この文は九月初旬の情景を感覺的に書いた文學的な香りの高い文章である。九月になる。今年の夏も終つて愈々秋が來た。何だか嬉しいやうな、なつかしいやうな氣がする。今まで餘りに強烈な刺激を支へて來た夏の疲れから解放されて、靜かな秋をなつかしむ心が實に巧に表現されてゐる。この點十分に體驗的に讀ませて感覺を鋭敏にさせるやう指導しなければならない。

(二) 晝間はまだ仲々暑い。しかし秋なのだ、どこかに秋の聲がしないだらうか、秋の匂ひはしないだらうか、秋の色がないだらうか。と探して、文の素材に秋らしいものゝ音、秋らしい物の色、秋らしいものゝ匂ひとを持つて來てゐる。

○秋らしいものの音。——蟲のこゑである。

- (1) 暑い日の午後裏山で「ツク／＼ボウシ。」の聲を聞く。
- (2) 晴れた夜空に星の耀く夜、前の草原で名も知らぬ蟲の聲を聞く。
- (3) 夜のともし火をしたひよる蟲に混つて微かな羽音をさせてスイッチが来た。
- (4) こほろぎが、家の中へはいつて床下や壁のわれ目で鳴く。

○秋らしいもの色——植物や空である。

- (1) 夜空がかすんで星の色も變つて来て銀河が鮮かに見える。
- (2) 日光はかすかに黄色味を帯びて壁や塀の強い反射が幾分やはらぐ。
- (3) 秋海棠が淡紅色の可愛らしい花をつける。
- (4) 菫の白い花にいちもじせゝりが飛びちがふ。
- (5) たんぼに早稲の穂が白々と波打つ。

○秋らしいものの匂ひ、——かうした音と色とを渡つて来る風である。

- (1) 晝の風はざわ／＼と梢をならす毎に、何か秋の香をたゞよはせる。
- (2) 夜の風は、瓦のしめりに露の匂ひをかすかに運ぶ。

(三) この文は時間的に長い風景文であるから作者の位置、文の構成に注意して指導しなければならない。表現機構からながめると序(秋まつ心)本文(夜、晝の秋のおとづれ)結びと書かれてゐる。「八月もなかばを越せば、どこかに秋らしいものが見えてもよさうなものである。」夏の暑さに倦きた心で秋をまちこがれ、じつと秋のおとづれて来る足音を聞かうとする氣持である。しかし仲々秋がおとづれない。三十度の暑さにぐちをこぼす。

「秋は蟲の聲から始まる。」秋らしいものを求めてゐた心に最初に聞いたのが蟲の聲であつた。ツク／＼ボウシである。「秋は蟲の聲から」は全文にかゝつてはゐない。最初に感じる秋のおとづれが蟲の聲だと云ふのである。ツク／＼ボウシの高鳴きが秋のおとづれを知らせると、やう／＼に色々のものに秋を知覚するのである。故にこゝまでが序である。

「二階に上つてみても、さして涼しい風はなささうである。」全くやりきれない暑さだ。二階に上つてみても駄目だと歎じてゐる心が如實に表現されてゐる。作者はかうして晴れた星空をながめながら秋を見出さうと感覺を尖らしてゐるのである。これが百二十七頁四行目から百二十八頁九行迄の作者の位置である。そうして夜を描いてゐる。

「此のくらのあいさやうのある氣のきいた蟲は、めつたにないものだ。」蛾や羽蟻にうんざりしてゐる時の喜びの聲であり、スイッチに對する親愛の言葉である。

「もう何といつても秋である。」こゝから晝の敘述にはいつてゐる。はつきりと秋を意識し得た安心である。

「河よりも、たんぼに……」河にも秋が来ればいゝ、けれど河の秋はどんなに來るのかしらとかすかに思つたであらう。しかしあの穂波は、と白く波打つたんぼに眼を轉じ秋を強く感ずるのである。

「やがて二十日が来て、……」早稲を見た感じは農家の風の心配へと情を移してこほろぎの聲を想像し、秋のさ中を具現して結んでゐる手法の巧みさ等注意すべき點である。

朗讀

讀本指導と朗讀法

ダイ ニジュー ニ、アキノ オトズレ、

アキワ ムシノ コエカラ ハジマル、

ヒルマワ、マダ アツイ アツイノ タンセーガ クチ

オ ツイテ デテ クル、マナツノ アツサワ ダレモ

カクゴオ シテ イルガ、ハチガツモ ナカバオ コセバ、

ドコカニ アキラシー モノガ ミエテモ ヨサソーナ

モノデ アル、ソレナノニ カンダンケーワ サンジュー

ドオ コエタガル、アツサワ モー タクサンダト イー

タク ナル、スルト アルヒノ ゴゴ、ウラヤマノ モリ

デ、ツクツクポーシ、ツクツクポーシノ コエオ キータ、

アツイ ヒガ ヤット クレテモ、ヨイノ アイダワ

イエノ ナカガ ムット シテ、ハシラモ カベモ、サワ

ルト ドーヤラ ネットキオ ハイテ イル、ニカイエ ア

朗讀上の注意

○「蟲の聲から」を別々にいふ時、アクセントは、ムシノ コエカラとなる。

〔参 考〕

アキ(秋・安藝)

アキ(飽)

アキ(明)

アツイ(暑い・熱い)

アツイ(厚い)

○「出て来る」と續けていふ時、クルのアクセントはあまり高くない。

〔参 考〕

アツサ(暑さ・熱さ)

アツサ(厚さ)

○「よささうなものである」と續けていふ時、下の二語のアクセントはあまり高くない。

○「言ひたくなる」を別々にいふ時、アクセントは、イータク ナルとなる。

○「午後」は、ゴゴと平板式にもいふ。

〔参 考〕

ヒ(日・碑)

ヒ(火・非・比・妃)

ヨイ(背)

ガツテ ミテモ、サシテ スズシー カゼワ ナサソード
 アル、タダ ハレタ ヨゾラニ ホシガ キラキラト
 サエ、ギンガガ アザヤカニ チューテンニ カカツテ
 イル、ソノ トキ フト ミミニ スル モノワ、マエノ
 クサハラデ ナク ムシノ コエデ アル、ソレガ ハタ
 シテ ナニムシデ アルカ ハツキリワ シナイガ、カナ
 リ タスーノ コエデ アル コトオ カンズル、ヨガ
 フケルト、オモイナシカ ヤネガワラガ スコシ シメツ
 テ クル、

ヨルノ トーカオ シタツテ クル ムシワ、ガヤ、コ
 ガネムシヤ、ハアリガ オーク、ドレモ コレモ タダ
 ウルサイダケデ アルノニ、ドコカラカ カスカニ ハオ
 トガ シテ、シヨージニ カルク バサト トマツタ ム
 シガ、ヤガテ スイツチヨ、スイツチヨオ クリカエス、

第二十二 秋のおとづれ

ヨイ(善い)
 ヨイ(酔)
 ハイテ(吐いて・掃いて)
 ハイテ(穿いて・履いて)
 ○「熱氣を吐いて」を別々にいふ時、アクセントは、ネットキオ ハイテとなる。
 ○「上つてみても」を別々にいふ時、アクセントは、アガツテ ミテモとなる。
 ○「ななさうである」と續けていふ時、アルのアクセントはあまり高くない。
 ○「...である」といふ場合は以下同断。
 〔参 考〕
 ハレタ(晴れた)
 ハレタ(腫れた)
 ○「其の時」「するものは」は、それぞれ別々に、ソノ トキ、スル モノワともいふ。
 ○「聲であることを」と續けていふ時、下の二語のアクセントはあまり高くない。
 〔参 考〕
 ヨ(夜・世・余・餘)
 ヨ(代)
 ガ(蝦・我・畫)
 ○「しめつて来る」を別々にいふ時、アクセントは、シメツテ クルとなる。
 ○「どこからか」の「こ」の母音が無聲化し易いところから、ドツカラカの如くなることがあるが、ドコカラカとコをはつきりいふが

コノ クライ アイキョーノ アル キノ キータ ムシ
 ワ、メツタニ ナイ モノダ、ソーシテ、ソレガ、シキリ
 ニ アキダ アキダト ナキタテル ヨーニ オモワレル、
 モー ナント イツテモ アキデ アル、ヨシ ヒルマ
 ワ ドンナニ アツカロトモ、ニツコーワ カスカニ
 キーロミオ オビテ、カベヤ ヘーノ ツヨイ ハンシヤ
 ガ イクブン ヤワライデ ミエル、コズエ フク カゼ
 ガ、オモイダシタ ヨーニ ザワザワト オトオ タテル、
 セドノ ミゾバナニ、シューカイドーガ カワイラシー
 タンコーシヨクノ ハナオ ツケル、ハタケノ ニラノ
 ハナニ、アタマデツカチナ イチモジセセリガ トビチガ
 ウ、ナニヨリモ、タンボニ ワセノ ホガ デソロツテ
 シロク ナミウツノガ、アキラシク ミワタサレル、
 ヤガテ ニヒヤクトーカガ キテ、ノーカワ タダ カ

よい。
 ○「ば」と「は」はアクセント不定。
 ○二度目の「スイツテ」の次には休止をおかないでよい。
 ○「鳴き立てるやうに」と續けていふ時、ヨールのアクセントはあまり高くならない。

○「やはらいで見える」と續けていふ時、ミエルのアクセントはあまり高くならない。
 ○「思ひ出したやうに」を別々にいふ時、アクセントは、オモイダシタ ヨーニとなる。
 (参考)

ハナ(花)
 ハナ(鼻)
 ハナ(最初)
 ツケル(附ける・着ける)
 ツケル(渡ける)
 ホ(種)
 ホ(帆)
 シロク(白く)
 シロイ(白い)

ゼバカリオ シンバイスル、ヨルワ、ソロソロ コーロギ
 ガ イエノ ナカエ ハイツテ、ユカノ シタヤ カベノ
 ナカデ コエ タカク ナキタテル、

シタ(下)
 シタ(舌)
 ○「厚高く」を一語につけていふ時はコエダカクとなる。

四 指導概要

(一) 教材

- (1) この文は暑い夏に倦きて秋の静かなおとづれを待ち望む心が熾烈に動いてゐるから、この點十分體驗を喚び起させて讀ませるやうにしなければならない。
- (2) 感覺的に書かれてゐるから文の機構から一語一句の閃きにまで耳をすまさせ、眼を見ひらかせ感觸を尖らせて讀み味はせなければならぬ。五年生も既に一學期を終つて次第に子供達の耳も眼も發達して來てゐる。物を見る眼、物を聽く耳、物を感じる心、進んで物のあはれを味ふ文學的情操を養ふに適した好い教材であるから指導上にも十分注意してほしい。
- (3) 指導の順序としては一讀先づこの文から受ける氣持を整理してやり、臆氣ながらも秋のおとづれをなつかしむ心を起させ、秋の色、音、匂ひ等の感覺を縦に見又文の機構からその序、本文、結びと横にも解釋させて文意に到達する様にしよう。
- (4) 新出文字として、歎、河の二字、讀替に、暖、床、の二字が出てゐるに過ぎない。文字指導には左程の困難は第二十二 秋のおとづれ

ないから主力は文學を味はせる事に注がなければならない。

- (5) 口をついて出て来る。越えたがる。さはるとどうやら熱氣を吐いてゐる。屋根瓦が少ししめつて来る。ばさど止つた蟲。等の句は語義的な解釋のむづかしさはないが、文中の句、語として如何にもうま味がある。頭でつかち、は俗語でありはめた言葉ではないがこの文では少しも下卑て聞えない、寧ろ文學的な匂ひがあつてよい。十返舎一九の膝栗毛さへ取入れられた、かなりくだけた編纂の趣意も買はなくてはならない。
- (6) 綴方にもこれ位のもので書けるやうにしたのであるが、直に模範文にと志すことは高すぎるであらうから、こんな態度で物を味ひ、眺め聴くといふやうな風に指導するがよい。
- (7) 本文には挿畫はないが、讀後、繪に表現させるなり、詩(兒童詩)、童話に改作させるなり、特殊な兒童には之を音楽に表現させる等工夫して見ることも、この文を味ふ手段として面白いだらう。

(二) 準備

秋海棠、葦の實物或は標本、ツクツクボウシ、スイッチ、いちもじせりの圖、實物等。

三 参考

いちもじせり(いちもんじせり、一文字挿)全日本、印度、支那、シベリヤ等にわたつて各地に廣く分布し、極めて普通の種類である。翅張四十二ミリメートル許、體長十七ミリメートル内外、翅は黒褐色で、之れに稍半透明な方形の白斑が前翅では稍々環狀に、後翅では四箇が一文字に排列してゐる。卵は饅頭形で綠色、幼虫の成長したものは三十ミリメートル内外に達し、綠色である。俗に(ハマグリムシ)と云ふのはこれで「イネ」の葉を綴つてその中にゐる盛に喰害して、大害を興へるものである。(内外動物原色大圖鑑)

第二十三 袴はかま 垂たれ

一 要旨

袴垂の物語を讀むことによつて、心の力の如何に強いかを感じしめ、目に見えぬ心の力にはいかに鋭い刃も立てる事が出来ない事實を悟らしめる。

二 指導観

(一) この文は保昌と袴垂との心と刃の戦を描いた物語であつて、心の力が如何に強いかを示唆してゐる。剽盜袴垂が着物をはぎとらんと町はづれに待ち構へてゐると、あたゝかげなる着物を着た、身分いやしからざる人が来る。「よき獲物かな。」で飛びかゝらんとするところから書き初めて、袴垂の内心の葛藤を筋に物語つてゐる。文語文で簡単に話は進んで行つてゐるが味が深い。

(二) 表現の手法を吟味して見ると

- (1) たゞ一管の笛を吹いて四邊の何物にも心を止むる色なき落つきに——飛びかゝらんとすれども、近より難い。
- (2) 笛に心を澄して靜かに見かへる様に——音立てて近よりても、をどりかゝらん術もなく唯隨ひ行く。
- (3) 何者ぞの一聲に——刃をぬきたる身ちゞみて思はず跪く。
- (4) 何者ぞの二聲に——思はず自分の名を告げて震へる。

- (5) 我につきて來れ——の言葉に逃げることも出來ず目に見えぬ力に引きずられてついで行く。
- (6) 綿入れを與へられて——これ程恐ろしかりし事はなかりきと嘆息させてゐる。
- (三) 保昌の態度は終始一貫落着きと澄心、明鏡止水の境地、動搖がなく隙がない。
- (四) 百三十二頁十行目の「保昌は家に入り」から敘述の手法が保昌を主體として俄然變へられてゐるから指導の際の文の主體を整へて兒童が文脈の混亂を感じないやう手心したいものである。
- (五) この文が心と刃との戦を敘してゐるために極く短時間の敘述であるが、非常に動いてゐる點注目すべきで、指導の際も躍動的に行動的に取扱ふべきである。

朗讀

本文

ダイ ニジュー サン、ハカマダレ、
 ムカシ、ハカマダレ ト ユー ヌスピト アリケリ、
 キモノオ ハギ トラントテ、アルヨ、マチハズレニ
 イデテ ヒトノ キタルオ マチ イタルニ、ミブン イ

朗讀上の注意

- 「はぎ取らんとて」を別々にいふ時、アクセントは、ハギ トラントテ となる。
- 「人の來るを」は、ヒトノ キタルオ といつてもよい。

ヤシカラザル ヒト アタタカゲナル キモノ キテ フ
 エオ フキナガラ アユミ キタレリ、
 ヨキ エモノカナト、タダチニ トビカカラント オ
 モエドモ、ソノヒトノアマリニ オチツキタルニ キオ
 ノマレテ チカヨリ ガタシ、ウシロヨリ シタガイ
 ユケドモ、ソノヒトスコシモ キニ トムルケシキナ
 シ、ワザト アシオトオ タテテ ハシリ ヨレバ、フエ
 オ フキナガラ シズカニ ミカエル、マスマス キオク
 レシテ オドリカカラン ヨーモナク、タダ、モトノゴ
 トクニ シタガイ ユク、
 ジツチョー ホドモ ユキテ、イヨイヨ ココロオケ
 ッシ、カタナオ スキテ キリカカレバ、コノタビワ
 フェオ フキ ヤメテ フリカエリ、
 ナニ モノゾ、

- 「笛を吹きながら」は、フェオ フキナガラ といふ人もある。
- 【参考】
 アユミ(歩み)
 アユム(歩む)
- 「とびかゝらんと思へども」は稍速くいふがよい。
- 後の「アクセントは平板式である。」

- 足音のアクセントは、
 アシオト(平板式)
 アシオト
 アシオト
 のいづれでもよい。
- 「足音を立てて走り寄れば」の所は稍速めに讀むがよい。
- 【参考】
 ジツチョー(十町)
 ジツサツ(十冊)
 ジツバ(十羽)
 ジニュー(十)
- 「何者ぞ」は力強く、ふがよい。

ト ユー、ソノ ヒトコエニ ミノ チジム ゴトク オ
 ボエテ、オモワズ チニ ヒザマズク、フタタビ、
 ナニ モノゾ、
 ト トワレテ、
 ススビトノ タイショー ハカマダレ、
 ト フルイナガラ コト、
 キキタル コトモ アルナナリ、ワレニ ツキテ キ
 タレ、
 ト イーテ、マタ マエノ ゴトク フェオ フキテ ユ
 ク、
 イマワ ニグル コトモ カナワズ、オソル オソル
 アトニ シタガイテ ソノ イエニ イタル、ナニビトカ
 ト オモエバ、ソノ コロ プメー カクレナキ フジワラ
 ノ ヤスマサナリ、ヤスマサワ イエニ イリ、ワタイレ

○二度目の「何者ぞ」は、静かに尋ねるやうに
よ。

○袴垂の言葉はふるへながらいかにも恐る恐る
いふ心持の表れるやうにいふがよい。

○「聞きたる事も……」以下保昌の言葉は静か
にやさしくいふがよい。

○「恐る」の、アクセントは、オソルと平板式
である。

イチマイ トリイダシテ ハカマダレニ アタエ、
 コレオ トリテ、ユケ、ヨカラヌ ワザシテ ヒトオ
 クルシムル コト ナカレ、
 ト イー キカセタリ、
 ソノノチ、ハカマダレ コノトキノコトオ ヒトニ
 カタリテ、
 コレホド オソロシカリシ コト ナカリキ、
 ト イータリ トゾ、

○「よからぬ業して……」の保昌の言葉は、やさ
しく言ひきかせるやうにいふべきである。

○「言聞かせたり」の次は、稍休止をおいたが
よ。

指導概要

(一) 教材

(1) 表題にも袴垂となつてゐるので主體を袴垂に置いて文脈を流すがよいと思ふ。百三十二頁の十行九字目からを
 次のやうに書き替へて見ると文脈も通るやうである。
 保昌の家にて、綿入一枚を與へられ、「これを取りて行け、よからぬ業して、人を苦しむることなかれ。」
 と言聞かせられたり。

- (2) こんな文は唯表現面ばかりを辿つて讀んでは面白味はないが、袴垂なり、保昌なりの人物を想定して讀ませると一語一句に實に味ひの深いものを發見して來る。もう文語文の讀解にも相當馴れて來てゐるのであるから、こんな指導に方向をむける必要がある。
- (3) 新出文字は、至るの一字、讀替に、歩みの一字が出てゐるばかり、このあたりでは文字の指導に苦勞はない。語句は取出して見ると仲々面白いものがある。
- (4) ぬす人、着物をはぎ取らんとて、町はづれ、待ちゐるに、身分いやしからざる、あたゝかげなる着物、よき獲物、飛びかゝらん、落着きたる。
從ひ行けども、氣に止むる氣色なし、足音を立てゝ走り寄れば、靜かに見かへる、切りかゝれば、吹止めて、ふりかへり等、その對照をとつて如何にも心の力と刃の力、善と惡、靜と動との葛藤を巧みに表現してある。
- (5) 以上の如き語を對照的に板書して場面を想定させて行けば、文字語句のみによつても躍動せる場面を描き出し文章理解をよく助ける事が出来るであらう。

(二) 挿畫

藤原保昌が笛を吹きながら靜かにふり返つてゐる。袴垂はをどりかゝらんやうもなく刀の束に手をかけながら及び腰に從ひ行く圖。

(三) 準備

掛圖。

参考

(一) 藤原保昌、藤原保昌は三條天皇御宇の武人、大納言元方の孫である。豪勇にして武藝に通じ膂力人に過ぎ源賴信等と名を齊うした。

嘗て巨盜袴垂が都下を横行して偶々保昌がこれに尾せられたが願みて自若として笛を吹き、袴垂が其の刀を以て撃つに及び叱して名を問ひ家に伴ひ衣を與へ誠めて去らしめたと云ふ。

(二) 市原野 歌舞伎脚本

今昔物語にある藤原保昌と袴垂保輔の一條を脚色したものである。洛外市原野の芒原を平井保昌が烏帽子狩衣で笛を吹いて通つて行くと盜賊袴垂保輔と牛の毛皮を被つた鬼童丸とがいづれも保昌の身邊をうかゞひ寄つて三人だんまり模様になるといふ繪のやうな場面である。はじめ脚本中には文政五年十二月市村座上演の「御最負竹馬友達作者四世鶴屋南北」に於てであるが、その長い脚本のうち市原野の場だけが舞臺に残りその脚色も種々に變りつつ演ぜられたが、遂に前にのべたやうな一幕物として今日も演ぜられてゐる。

(三) 市原野は、京都府愛宕郡靜市野村の大字、もと市原野と稱し廣い原野であつた。怪賊鬼童丸がこの野に潜伏してゐたといふ。藤原惲篤晚年棲居の地でその終焉の遺跡がある。

(四) 本文の原據は今昔物語。

第二十四 ひざ栗毛

一 要旨

短き膝を栗毛の駒にかへて長い道中を旅する彌次郎、北八物語を讀ませて、不相應若しくは不釣合から起る好笑の情緒を呼び起す諧謔の醍醐味を十分に味はせ、二人の恬淡で滑稽な性格から醸し出す雰圍氣を理解させるとともに江戸時代の人情、風俗、習慣をも知らしめる。

二 指導観

(一) この課は江戸時代の代表的諧謔文學、十返舎一九の東海道膝栗毛から取材されたものである。物語の主人公、彌次郎と北八とが江戸を後に足の向くまゝ明け暮れの東海道の旅を、いかにものんびりと、可笑しく滑稽に續けて行く。一、小田原の宿。二、大井川。三、大原女の三場面を描いてあるが、眞面目に考へれば、何れも他愛もない話である。馬鹿らしい話、しかし本文が大眞面目であるところがかしい。その可笑しさを、あつさり呵々と笑ひ放つことが出来ればそれでいゝのである。一人で讀んでほゝ笑ましくなり大勢で讀んで呵々大笑の聲が出れば既に諧謔の醍醐味を味ひ、性格描寫の巧みさも理解し得たのである。自ら之によつて江戸時代の人情、風俗、習慣等も窺知し得るであらう。

(二) 小田原の宿

(1) 北八が五右衛門風呂のはいり方を間違へて失敗したところが如何にも滑稽である。北八は非常に恬淡で且つ性急な性格であつて物事を深く考へない。この一文は彼のさうした性格から出る失敗の滑稽と言へるだらう。

(イ) 「北八お前へはいれ。」と彌次郎に言はれ、よし来たとはばかり、手ぬぐひをさげて……(恬淡)

(ロ) 湯に浮いてゐる圓い板を一見して、ふたと思ひ、とりのけて早速片足を入れる。(性急)

(ハ) 「あつゝゝ。これはとんでもない風呂だ。」と自分のはいり方の間違ひに氣づかぬ。(性急)

(ニ) 聞くのもめんだうだ。(恬淡)

(ホ) これ幸と下駄をはいて風呂にはいる。(恬淡)

(ヘ) 氣持好きさうに歌を歌ふ。(恬淡)

(ト) 底の方が熱くなつて来て、立つたり、すわつたり、下駄ばきのまゝで、がた／＼蹈む。(性急)

(チ) やあ助け船大變々々。(性急)

(リ) いや、命だけは無事だが、風呂の底が抜けて。(恬淡)

(1) 諧謔文であるために、餘りくどくしい説明を加へずに端的に事實だけを表現した味ひのあるところを注意しなければならぬ。

「東海道を歩いたり、かごに乗つたり、馬にのつたりしながら、」全くのびやかな旅の情景である。美しい富士の立ち姿を眺めながら歩き、かごやにかごをすゝめられ、斷るもめんだうとかごに乗り晴れた空に響き渡る駒のいなゝきの心地よさには飄々として馬に乗り、氣の向くまゝ足の向くまゝさながらの表現である。

「宿を取つて草鞋をぬぎ……」當時の旅宿のなつかしい風景が見えるやうだ。
 「今まで見たこともない妙な風呂」五右衛門風呂の説明を要求してゐるが疑問としない呑氣さがある。
 「風呂へ片足を入れてびつくり、」片足を入れてはじめてびつくり感覺の遲鈍さの可笑しみがある。とんでもない風呂だ。と獨言にいはしてゐる。
 「これ幸と、」如何にも困つてゐた時のよろこび。
 「氣持好きさうに歌を歌ひ出しました。」とにかく變な風呂でもはいる事が出来て一日の汗をながす時の伸びやかな氣持。
 「立つたり、すわつたり、下駄ばきのまゝでがた／＼蹈んでゐます。」この文の一ばん面白いところである。水をうめよう事も、自分が出よう事も考へないで、たゞ湯の熱さに抵抗する事ばかりを考へてゐるところの滑稽さである。

「この人はとんでもないお方だ。」お方だと如何にもあはてゝゐる。

(三) 大井川

(1) 彌次郎が武士になりすまし、武士の威厳で大井川を安く渡らうとして失敗するところ、彌次郎は多分に滑稽性をもつてゐる。即ちおどけたり、人をからかつたりする無邪氣な揶揄弄性がある。

(イ) 武士になりすますため、北八の脇差を取つて差し自分の脇差は鞘袋をすらしめて長刀に見せかける。

(ロ) 北八をお供に仕立てる。

(ハ) 武士の言葉をつかふ。

(ニ) 御同勢はと聞かれ、二人しかゐるのに平然と武士十二人、槍持草履取其の外都合三十人等と大法螺を吹く。

(ホ) 其の人々はどこにおいででございませうといはれ、江戸から大井川までに二十八人病氣にしてしまふ。そしてたつた二人と空嘯く。

(ヘ) 刀の鞘袋の曲つてゐるのを言はれそ／＼に逃げ出すあたり飄逸で實に面白い。

(2) 親方は最初から偽武士と知つて面白半分にあしらひ、色々／＼とつこんでゐたが、商賣の掛引になつた時、切すて御免の武士と奉つてゐては大變と皮を剝いたのである。然しこんな事は一々詮索する必要はない。端的に事實だけを描寫した味はひある表現を指導すればよい。

(イ) 「高い／＼もうお前達の世話にならぬ。」と、この言葉を言放つた時、既に彌次郎は性格的なたくらみをはかつてゐる。

(ロ) 「どうだ、これで大小を差したりつばな武士に見えるだらう。」いかにも得意の態である。

(ハ) 「お前はお供だ。ついて來い。」北八は二の句がつけない。

(ニ) 「御同勢はお幾人だ。」「なに同勢か。」思ひがけない問ひであつた。一寸まごついたが、もつたいぶつてきゝかへしてゐる。

(ホ) 「して其の方々はどこに……。」とたゞみかけられ、彌次郎天性の嘲弄性を發揮して、

(ヘ) 「江戸出發の時は三十人であつたが道中で、追々病氣を致し……たつた二人だ。」と常規を脱してゐる。

(ト) 「は、は、は、大笑だ。彌次さん、さあ行かう。」北八のこの笑ひは鞘袋の曲つてゐたのと彌次郎のいつもの

讀本指導と朗讀法

芝居の終結の可笑しさを交ぜたものである。そして、
(チ)「北八にさそはれて、」一寸すくはれた氣持で、そこへ逃出した彌次郎とのまことに面白い對象である。

(四) 大原女

(1) 彌次郎はこゝで又大原女をかつがうとしたが、却つて大原女に梯子をかつがせられてしまった。北八は怒つて見たがはじまらない。いつも和かな二人である。仲よく長い梯子を差合ひでかついで京の街を歩くをかしさ。
(イ) 彌次郎も北八も珍らしさうに眺めてゐた——のんきな旅である。

(ロ) 一人の大原女が彌次郎のそばへよつて来て、云々——彌次郎は性來の氣質を表はしてにやり／＼してゐたにちがひない。

(ハ) 「此のれん木を買つて下さい。」——大原女は一ばん手がなるものを賣らうとしたのだらう。

(ニ) 「梯子なら買つてやらう。幾らだ。」——と一番大きなものをふつかけた。

(ホ) 「高い／＼。二百なら買つてやらう。」——七百文を二百にねざれば賣る氣づかひなしと思つた。

(ヘ) 「や、まけるのか。情ない事を言ふ。」——まけられたら一大事である。「さあ持つて行つて下さい。」と強硬に出られて、「あやまる／＼。」と悲鳴を上げる。

(2) かうして、長い梯子をかつぎながら京の街を見物してある彌次郎と北八とは、今年から小學讀本にのせられて爆笑を各地に起させて、將來は日本全國の人々の腦裡にくすぐつたい微笑をのこし、明朗な國民性を作る基とならう。

(五) この様な人情の機微に觸れた、軽く明るい可笑しさをもつ文學は五年生位にもなれば大概理解出来ると思ふ。この頃の子供の生活の中にも時々見られる事であるから、我々はいつても深刻な顔ばかりしてゐないで、こんな諧謔文學も十分に自らも味はひ、子供達にも明朗に大笑し得る性格を作つてやらなければならぬ。この文は原文の下車た點をぬいて割合に上品に無邪氣に書かれてゐる。編纂の苦心の存する程が偲ばれる。

朗讀

本文

ダイ ニジュー シ、ヒザクリゲ、

イチ、オダワラノ シユク、

ヤジロート キタハチワ、エドオ タツテ トーカイド

ーオ アルイタリ、カゴニ ノツタリ、ンマニ ノツタリ

シナガラ、フツカメノ ユーグレニ オダワラニ ツキマ

シタ、

ヤドオ トツテ、ワラジオ ヌギ、アシオ アラツテ

ザシキエ トーリマシタ、マモナク ジョチユーガ キテ、

フロノ アンナイオ シマシタ、

朗讀上の注意

○「ひざ栗毛」はヒザクリゲと平板式にいつてもよい。

○「東海道」は トーカイドともいふ。

○「宿を取つて」を續けていふ時、トツテのアクセントはあまり高くない。

〔参考〕
アシ(足)
アシ(蘆)

○「間もなく」は、マモナクともいふ。

○「風呂」を單獨にいふ時は、フロといふが、

キタハチ。オマエ サキエ ハイレ、
 ト ヤジローガ イーマシタ。ヨシ キタト バカリ、キ
 タハチガ テヌグイオ サゲテ、 フロバエ イツテ ミ
 ルト、イママデ ミタ コトモ ナイ ミヨーナ フロデ
 ス、エノ ウエニ マルイ イタガウイテ イマス、ソレ
 オ フミシズメテ ハイルノデスガ、キタハチワ フタダ
 ロート オモツテ、トリノケマシタ、ソーシテ フロエ
 カタアシオ イレテ、ビツクリ シマシタ、ソコワ テツ
 ノ カマデス、
 アツツツツ、コレワ トンデモナイ フロダ、
 シカシ キクノモ メンドーダ ト オモツテ、アタリオ
 ミマワスト、ニワニ ゲタガ イツソク オイテ アリ
 マス、コレ サイワイト、ソノ ゲタオ ハイテ フロニ
 ハイリマシタ、

こゝでは「の」の助詞をともなつてゐるから、アクセントは平板となる。

○「よし来たとはかり」は、勢をつけて早くいふ。

○「行つてみると」を別々にいふ時、アクセントは、イッテ、ミルトとなる。

○「見たこともない」を続けていふ時、下の二語のアクセントはあまり高くならない。

○「びつくりしました」を続けていふ時、シマシタのアクセントはあまり高くならない。

〔参考〕

カマ(釜)

カマ(鎌)

キク(聞く・利く)

キク(菊)

○「置いてあります」を別々にいふ時、アクセントは、オイテ、アリマスとなる。

○「これ幸と」は続けて速くいふがよい。

キタハチワ キモチ ヨサ ソーニ、ウタオ ウタイダ
 シマシタ、
 ダガ、ナガク ツカツテ イルト、ソコノ ホーガ ア
 ツク ナツテ キマシタ、タツタリ スワツタリ、ゲタバ
 キノ ママデ ガタガタ フンデ イマスト、トツゼン ソ
 コガ スケテ、ユワ スツカリ ナガレ デテ シマイマ
 シタ、
 ヤー、タスケブネ、タイヘン タイヘン、
 コノ コエオ キキツケテ、ヤジローモ ヤドノ シュ
 ジンモ、トンデ デテ キマシタ、
 ドーシタ ドーシタ、
 ドー ナサイマシタ、
 イヤ、イノチ ダケワ ブジダガ、フロノ ソコガ ス
 ケテ、

○「氣持好さうに」を別々にいふ時、アクセントは、キモチ ヨサソーニとなる。

○「底の方が」を別々にいふ時、アクセントは、ソコノ ホーガとなる。

○「熱くなつて来ました」を続けていふ時、下の二語のアクセントは、あまり高くならない。

○「がた／＼」を、ガタガタといつてはいけな

○「飛んで出て」を別々にいふ時、アクセントは、トンデ デテとなる。

○「飛んで出て来ました」を続けていふ時、キマシタのアクセントは、あまり高くならない。

○「どうなさいました」を続けていふ時、ナサイマシタのアクセントは、あまり高くならない。

〔参考〕

ブジ(無事)

ブジ(武事)

シユジンワ ビックリシテ、
 ドーシテ マタ ツコガ スケマシタ、
 ツイ ゲタデ ガタガタ ヤツタノデ、
 イヤ、コノ ヒトワ トンデモナイ オカタダ、ゲタバ
 キデ フロエ ハイル ヒトガ アル モノデスカ、
 ニ、 オーイガワ、
 フタリワ スルガノ オーイガワ マデ キマシタ、キ
 コーワ ミズガ オーイノデ、レンダイデ ナクテワ コ
 セナイト ユー コトデス、
 ヤジローワ ニンブニ キキマシタ、
 イツタイ イクラデ ワタス、
 オフタリデ ハツビヤクモン クダサイ、
 タカイ タカイ、モー オマエタチノ セワニ ナラヌ、
 ト アシバヤニ トーリスギテ、ヤジローワ キタハチニ

- 「どうして又」は勿論續けていなければいけない。
- 「いや」をあまり強くない方がいい。
- 「あるのですか」は詰る氣持で強くない。なほ終は下り調子にいふがよい。
- 「大井川」は オーイガワといつてもよい。
- 「連聲でなくては」を別々にいふ時、アクセントは、レンダイデ ナクテワとなる。
- 「八百文下さい」の次の休止はごく短くした方がよい。
- 「高い」は續けて強くない。
- 「世話にならぬ」を續けていふ時、ナラヌのアクセントはあまり高くない。

イーマシタ、
 オマエノ ワキザシオ カシテクレ、
 ナニニ スルノダ、
 コーシテ プシニ ナルノダ、
 キタハチノ ワキザシオ トツテ サシ、ジブンノ ワキ
 ザシワ サヤプロオ スラシテ、ナガイ カタナノ ヨ
 ーニ ミセカケマシタ、
 ドーダ、コレデ ダイショーオ サシタ リツバナ プ
 シニ ミエルダロー、
 オマエワ オトモダ、ツイテ コイ、
 ヤジローワ ニンブノ オヤカタノ トコロエ イツテ、
 プシラシー コトバデ イーマシタ、
 ミドモワ シニョーデ トールモノダ、カワゴシニソクオ タノムゾ、

- 「脇差」は ワキザシともいふ。
 - 「どうだ」は得意な氣持があらはれるやうに強くない。
 - 「ついて来い」は短く強くいつた方がいい。
 - 「通る者だ」を續けていふ時、モノダのアクセントはあまり高くない。
- 【参考】
 コイ(来い・鯉・戀・故意・濃い)
 サシ(刺し・指し)
 ジブン(自分・時分)

カシコマリマシタ、ゴドーゼーワ、オイクタリデ、
 ナニドーゼーカ、プシガジューニニン、ヤリモチ、ゾ
 ーリトリ、ソノホカ、ツゴー、サンジューニン、
 シテソノカタガタワドコニ、オイデデ、ゴザイマス、
 イヤ、エドオ、シユツタツスル、トキワ、サンジューニ
 ンデ、アツタガ、ドーチューデ、オイオイ、ビョーキオ
 イタシ、シユクジユクニ、ノコシ、オイタ、ソレデ
 イマ、ドーゼート、ユーノワ、ジョーダ、アワセテ、タ
 ヲタ、フタリダ、
 オフタリナラ、レンダイデ、シヒヤク、ハチジューモン
 デ、ゴザイマス、
 イヤ、ソレワ、タカイ、スコシ、マケロ、
 オヤカタワ、キユーニ、コトバオ、カエマシタ、
 タカケリヤ、ヤメテ、サツサト、イクガイ、

○「なに同勢か」はそしらぬ顔にいひくるめよ
 うとする言葉であるから軽くいつた方がよ
 い。
 ○「槍持」は、ヤリモチともいふ。
 ○「おいででございます」を別々にいふ時、ア
 クセントは、オイデデゴザイマスとなる。
 ○「いや」は平板に軽くいつた方がよい。

【参考】
 ユー(言ふ・結ぶ)

○「四百八十文でございます」を続けていふ時
 ゴザイマスのアクセントはあまり高くなら
 ない。
 ○「いや」は稍強くいふ。

【参考】
 キユー(急・灸)
 キユー(級・球・舊)

コレ、プシニ、ムカッテ、ナンタル、プレーナ、コトバ
 ダ、
 オマエ、ソレデ、プシカ、ソノ、カタナオ、ミルガ、イ
 ー、
 フリカエツテ、ミルト、カワノ、サヤプロガ、ハシラニ
 ツカエテ、クノジナリニ、マガツテ、イマス、
 ハ、ハ、ハ、ハ、オーワライダ、ヤジサン、サー、イコ
 ー、
 ト、キタハチニ、サソワレテ、ヤジローワ、ソコソコニ
 ニゲダシマシタ、
 サン、オハラメ、

トートー、キョートニ、キマシタ、シジョードーリオ
 アルイテ、イルト、オハラメタチガ、シバヤ、スリコギヤ、
 ツチャ、ハシゴヤ、ソノホカ、ナンデモ、アタマニ、ノセ

○「向かつて」で「一寸切つて」「何たる」を強めて
 いった方がよい。

○「それで」は少しゆつくりいつた方がよい。
 「武士か」の終は下り調子にいふ。
 ○「見るがい」を続けていふ時、イーのアク
 セントはあまり高くない。
 ○「革」のアクセントは、カワであるが、助詞
 の「の」がついた爲に平板となる。

【参考】
 ツカエテ(支へて)
 ツカエテ(仕へて)
 ○「は、は、は」は連続的に呼吸を強くしてい
 ふ。
 ○「さあ行かう」は促す氣持で稍強くいふ。

○「京都に來ました」を続けていふ時、キマシ
 タのアクセントはあまり高くない。
 【参考】
 シバ(柴・芝)
 ツチ(穂・土)

テ、ウリアルイテ イマス、ヤジローモ キタハテモ、メ
 ズラシソーニ ナガメテ イマシタ、スルト ヒトリノ
 オハラメガ、ヤジローノ ソバエ ヨツテ キテ、
 コノ レンギオ カツテ クダサイ、
 ト イーマス、ヤジロー、
 ナンダ スリコギカ、ソナナ モノワ イラナイヨ、
 ナンナリト カツテ クダサイ、
 ヤジローワ ジョーダンハンブンニ イーマシタ、
 ハシゴナラ カツテ ヤロー、イクラダ、
 ヤスクシテ オキマス、シチヒヤクモン クダサイ、
 ヤジローワ、ドーセ カウ キデワ アリマセンガ、
 タカイ タカイ、ニヒヤク ナラ カツテ ヤロー、
 ト イーマシタ、
 ダンナ アンマリデス、ゴヒヤクニ シテ オキマシヨ

- 「實歩いてゐます」を續けていふ時、イマス
 のアクセントはあまり高くない。
- 「眺めてゐました」を續けていふ時、イマン
 タのアクセントはあまり高くない。
- 〔参考〕
 ソバ(飼・蕎麥)
 ○「買つて下さい」を別々にいふ時、アクセ
 ントは カツテ クダサイとなる。
- 「彌次郎」の次に少し間をおいていはいないと
 北八が彌次郎にいひ掛けたやうに聞える。
- 「何だ」で切つていふと、「それは何だ」とき
 きたゞしたやうな意味になるからよくな
 い。
- 「いらぬよ」の終は下り調子にいふ。

イ、
 イヤイヤ、ニヒヤクデ ナクテワ カワナイヨ、
 ヨー ゴザイマス、マケテ オキマシヨ、
 ヤ、マケルノカ、ナサケナイ コトオ ユー、
 サ、モツテ イツテ クダサイ、
 イヤ オレワ タビノ モノダ、ハシゴオ モラツテモ
 シカタガナイ、アヤマル、アヤマル、
 シカシ、コーナルト オンナワ ナント イツテモ キ
 キイレマセン、トートー ヤジローワ ハシゴオ カワサ
 レテ シマイマシタ、
 コレ キタハチ、オマエ コレオ カツイデ クレ、
 トンデモナイ、イッタイ、ナンダツテ キョーノ マン
 ナカデ ハシゴオ カウノダ、バカバカシー、
 シカタガ ナイ、サシアイデ カツゴ、オマエモ ツ

- 「ヤ〜」は強くない。
- 「ようございます」を續けていふ時、ゴザイ
 マスのアクセントはあまり高くないなら
 い。
- 「まけて置ませう」を別々にいふ時、アク
 セントは、マケテ オキマシヨ となる。
- 「ヤ」は強くない。
- 「いや」は軽く早くいふがよい。

○「仕方がない」を別々にいふ時、アクセント
 は、シカタガ ナイとなる。

キアツテ クレ、
 フタリワ ナガイ ハシゴオ カツギナガラ、キョートノ
 マチオ ケンプツシテ アルキ、マワリマシタ、

指導概要

(一) 教材

- (1) この文は指導観に述べたとほり、諧謔文學として江戸時代の代表的なものである。これが教科書に入れられることは可なり問題もあつたやうであるが、今まで微笑ましく讀まれる教材のあまり少かつた小學校の讀本にこれ位迄にくだけたものを入れられるに至つた事は劃期的な一大進歩と思ふ。この趣旨を十分體して、誤らないやうに十分注意して指導する事が肝要である。
- (2) 本文は彌次郎と北八の性格描寫が實に巧みに出てゐる。指導に當つては出来るだけこれらの人物の性格を十分に想定させて讀ませなければならぬ。
- (3) 新出文字、蹈、致しの二字、讀替文字、熱く、變、都合の四字に過ぎない。十二頁に亘る長文に比して文字の困難はない。主力を注ぐ點は繰返し／＼讀ませて文中に潜む諧謔の味、好笑の情緒を養ふ所にある。
- 百三十七頁の蓮臺は、東海道中膝栗毛の本文には蓮臺を用ひてある。蓮臺はちすのうてな蓮華座である。板に棒四本をつけて、川を渡るに用ふるものは盤臺（蓮臺ともかく）であるからこの文字を用ふべきである。この點文字を指導する場合研究して授けて欲しい。

- (4) 御同勢、道中、大原女、差合ひ等の語句は簡単に説明を要するが、特に語句として難解なものはない。然しその平易な言葉の用ひ具合で實によく滑稽な味ひが出てゐるからその點十分に注意すべきである。
- (5) この文は直ちに劇の形式に書きかへて表現させる事も出来るが、文そのものとして讀味は、させる事が肝要である。劇化等しては好まじからざる表現になり終る虞があるから注意したいところである。あくまで取り入れられた心持を付度して誤らないやうに注意したい。

(二) 挿畫

- (1) 百三十六頁、底が抜けて、やあ助け船大變々々と北八が呼んだ、彌次郎と宿の主人がかげつけたところ、彌次郎は手をあげて「どうしたどうした。」といつてゐる。宿の主人は「どうなさいました。」と驚いてゐる場面。
- (2) 百四十頁、人夫の親方のところへ行つて、「お前、それで武士か。其の刀を見るがい。」といはれ、ふりかへつて見ると、褌袋が柱につかへてくの字なりに曲つてゐる。彌次郎が失敗してゐる圖。
- (3) 百四十四頁、差合ひで梯子をかつがせられて京の町を歩いてゐる。遠方に五重の塔が見える。四條通である。

(三) 準備

掛圖。東海道五十三次の浮世繪、繪葉書等。

参考

出所は十返舎一九作、東海道中膝栗毛。

第二十五 空の旅

一 要旨

始めてあこがれの飛行機に乗って東京から大阪へ飛んだ飛行機の旅の面白さを味はせ、航空の興味を起させ、地理的観念を整理し、併せて、表現法の妙味を知らせる。

二 指導観

(一) 作者が東京から大阪まで飛行機に乗って旅をした途中の観察を絞した文で、國定教科書に始めて現はれた目新しい教材である。巻一で、青い空に銀の翼を見た児童は、巻九で第三の「飛行機の發明」を學習した後、こゝで遂にそれに乗ることまで發展するのである。

児童の飛行機に對する興味は想像以上であるから、好奇、驚異の眼を以てこの文に讀み浸らうとするにちがひない。その心理を十分に活かして指導に當らねばならない。

(二) 東京を出たのが午前九時、箱根が九時二十分、名古屋が十時三十五分、休憩二十五分で名古屋發 同二十三分奈良を左方に望み、同三十七分大阪に着いてゐる。所要時間は、名古屋の休憩二十五分を除けば僅かに二時間十二分である。汽車と、更に昔の旅と比較して指導すべきである。

(三) 高度の變化をみれば、横濱を過ぎる頃は自分の飛行機の影法師が見えるぐらゐ、箱根山にかゝつては一千三百

五十米、駿河灣上、稍下つて一千百米、再び陸に入つても、また、「下界は一見はなはだゆるゆると移動してゐる」ぐらゐに感ずる程の高度、濃尾平野に入つてからは三百米の低空、鈴鹿山脈の邊りでは又千米に上り、大阪近く漸く下つて低空になる。これも文に即して児童に讀みとらせなければならぬ。

(四) 特にこまかに觀察し、空中から見た特殊な面白い地形風景を描いてゐるのは、京濱郊外、箱根の俯瞰、駿河灣の海面、濃尾平野の人文的觀察、着陸前の大阪の市街等である。巧な表現を通して學習することによつて、自ら地理的観念を整理出来るやうに指導すべきである。

(五) 「空中から見る市街は何とまあ……」「模型圖のやうにきちんと……」「山といふものを空中から……」「すべて眞上から見る樹木はすこぶる……」「一面の田圃がちやうど方眼紙のやうに……」「みぞのやうな道路をきゆうくつさうに……」等は地上で見た感じと比較して空の旅の趣を知らせたい。

(六) 歴史的現在の表現法を用ひ、且つ極めて短いセンテンスによつて絞した處、目まぐるしく移りゆく景物を眼前に見つゝ走る氣持がよく現はれてゐる所を味はせなければならぬ。

(七) 文の終りの、「軍人さんは、今日の午後福岡へ飛び、明日は更に臺灣に飛ぶのださうだ。」では、航空路が福岡から臺灣にまで延びてゐる事を讀みとらせ、「幾らか不安であつた飛行機が……」からは、空の旅の快さを讀みとらせ空への憧憬を深めねばならない。

三 朗讀

讀本指導と朗讀法

本文

ダイ ニジューゴ、ソラ ノ タビ。

トーキョーカラ オーサカエ ヒコーキデ、コーカン
ガエルダケデモ ジツニ ユカイダ、コトニ キョーワ、
カゼモ ナイ アキビヨリデ アル。

キナイノ セキニ ツクト、チーサイ トピラガ ソト
カラ ポント シメラレル。ナンノ コトワ ナイ、リョ
カクキト ユーモノワ、ジドーシャオ ホソナガク
テ、ソレニ オーキナ ツバサオ ツケタ モノト オモ
エバ ヨイ。

ミオクリノ ヒトト、マドゴシニ カオオ ミアワセテ
ワラッテイル ウチニ、プロベラガ モノスゴク ウナ
リダシタ、ゴゼン クジデ アル、ミナガ テオ アゲテ、
ワカレノ アイズオ スル、イツノ マニカ キタイガ

朗讀上の注意

○「午前」は平板式にいつてもよい。

○「何時の間にか」を別々にいふ時、アクセン
トは、イツノ マニカ となる。

○「滑り出して」は、スベリダシテ といつ
てもよい。

スベリダシテ、グングン ソクリヨクガ クワワル。フ
リムイテ ミタガ、ウシロニ マドガ ナイノデ ダレモ
ミエナカッタ、ヒロイ ヒコージョーガ ツキテ、マエ
ワ カワダト オモッタ コロ、キタイワ モー クーチ
ユーニ ウカンデ イタ。

ホット シナガラ ダカイオ ノゾクト、ウミダ、フネ
ダ、タクサンノ ジンカダ、ソレニ シテモ クーチユー
カラ ミル シガイワ、ナント マー、セーゼント アザ
ヤカニ ウツクシー モノデ アロー、コレガ ヨコハマカ
ナト オモ マモ ナク、モー マエニワ コヤマガ
ツズイテイル、ダンダンバタケノ ヤサイガ、フルイツキ
タイホド アザヤカナ ミドリオ ミセル、ヤマト ヤマ
トノ アイダニ キーロイ カワノ ヨーニ ミエルノワ、
イナダデ アッタ、モリ、ジンカ、ドーロ、ハタケ、ソー

○「縁を見せる」と続けていふ時、ミセルのア
クセンとはあまり高くない。

○「森・川・皮」
カワ(川・皮)
モリ(森・樹)
モリ(守)

○「市街」
シガイ(市街)
シガイ(死骸)

○「期待」
キタイ(機體・氣體・期待)
キタイ(奇體)

ユー モノガ モケーズノ ヨーニ キチント シテ
 イル、ソノ アイダオ ヌツテ マツスグニ ハシル モ
 ノワ、ワタクシタチノ ノツテ イル ヒコーキノ カダ
 ボーシデ アツタ、
 ヒダリニ タイヘーヨーガ シロク ヒカツテ ミエル、
 ハレテイル ワリアイニ キョーワ エンボーガ キカナ
 イ、チヘーセンノ アタリワ ポット カスンデ イル、
 ミギワ ヤマヤマガ チカク ミエル、イツノ マニカ
 アオゾラニ フジガ ミエダシタ、
 マエノ コマダガ アイテ、キカンシガ シヘンオサ
 シダシタ、ゼンボー ハコネヤマト カイテ アル、ドー
 ジョーシャガ、ジュンジュンニ ワタシナガラ ウナズキ
 アウ、キナイデワ ジブンノ コエサエ キコエナイ、
 ダンワワ ヒツダンカ テマネ、キューニ オシニ ナツ

○「川のやうに」を讀けていふ時、アクセントは、カワノ ヨーニ となる。

○「見える」を「メール」いひ誤らないやうに注意を要する。

○「暗れ」と單獨にいふ時アクセントは、ハレであり、

○「ハレ」と平板式にいふ時は（隠れる）の意になる。

タト ドーヨーデ アル、コレカラ ノチモ カキツケガ
 タビタビ マワル、
 コードケーワ グングン ノボツテ、イッセン サンビヤ
 ク ゴジューメートルオ シメシタ、ソレト トモニ、アノ
 イダイナ ハコネノ ヤマヤマガ カタハシカラ ガン
 カニ ヒレフシ ハジメタ、クジ ニジツブンデ アツタ、
 ヤマト ユー モノオ クーチューカラ ミオロスト、
 イガイニ ハダタ バシヨノ オーイノニ オドロク、
 イタダキノ イワカダガ、テニ トレソーニ ハツキリト
 ミエタ ツギニワ、フカイ タニガ ドンゾコニ オー
 キナ クチオ ヒラク、ゲカイワ イマ オーナミノ ゴ
 トク ウネツテ イルノダ、ト、ゼンボーニ ミズウミガ
 ミエダシタ、アシノコデ アル、ナント ユー ウツク
 シー コイ アオサデ アロー、ヤガテ ミズウミノ イ

○「廻る」は、マール とならないやうに注意する。

〔参考〕
シメス（示す・温す）

○「意外」は、イガイ・イガイ のどちらでもよい。

○「大波の如く」を別々にいふ時、アクセントは、オーナミノ ゴトク となる。

ツカクオ カスメル ヨーニ トーリスギル、コハンノ
 イエ、ドーロオ ハシル ジドーシヤ、スベテガ ガング
 ノ ヨーニ チーサク、ガングノ ヨーニ ウツクシー、
 スマズカラ イツチヨクセンニ スルガワンノ ジョー
 クーオ ヒコースル ユカイサ、ナガイ ミギワガ、マル
 デ カンナデ メンオ トツタ ヨーニ キレーニ ツズ
 ク、カイスイワ エノグオ トカシタ ミズダ、ヨク ミ
 ルト、カイジョー イチメンノ ナミワ ウツクシー チ
 リメンデ アリ、テンザイスル ギョセンワ ムスーノ
 ゴマツブデ アル、コードケーワ イツセン ヒヤクメー
 トルオ シメシテ イルガ、フジワ ヤツバリ ヨコグモ
 ノ ウエノ アオゾラニ クツキリト ソビエテ、ソノ
 スソオ ナガク ゲカイニ ヒーテ、イル、
 フジガワガ ソソイデ、ソノ ダクリニューオ トーク

○「かすめるやうに」を別々にいふ時、アクセ
 ントは、カスメル ヨーニ となる。

〔参考〕

ナミ(波)
 ナミ(並)
 ナミウチギワ(波打際)

カイジョーニ オシダシテ イルノガ ミラレル、マツサ
 オナ エノグノ ミズニ、クリームオ ナガシコンダ ウ
 ツクシサダ、
 ミオノマツバラワ イガイニモ アツケナイ モノデ
 アツタ、アノ ウツクシー タクサンナ マツモ、ニレツ
 カ サンレツニ ナランデ ハエタ カワラヨモギトシカ
 ミエナイ、スベテ マウエカラ ミル ジュモクワ、ス
 コブル ヒンジャクデ アル、
 フタタビ リクニ イツタ、ゲカイワ イツケン ハ
 ナハダ ユルユルト イドーシテ イルガ、ソレデ イテ、
 スベテノ モノガ アット ユーマニ スギテ シマウ、
 シズオカノ ジョークーオ トーツタノモ ツカノマ、
 スグニ アベカワオ コエテ、マタ ヤマデ アル、
 オーイガワオ シリメニ カケテ ワタリ、ソレカラ

○「並んで生えた」を別々にいふ時、アクセ
 ントは、ナランデ ハエタ となる。

○「又山である」は又の次を一寸きるがよい。
 ○「しり目に掛けて」の カケテはあまり高く
 ならない。

シチフンノ ノチ、テンリニューガワオ コエ、サラニ ロ
 ヲブンノ ノチ、ハマナコノ キタカドオ カスメル、マ
 ルデ ドーチニスゴロクオ トンデ イク キモチダ、
 ソラニワ ダンダン クモガ フエテ クル、
 オカザキオ スギテカラ ヒロイ ヘーヤガ ツズイタ、
 イチポーノ デンボガ、チヨード ホーガンシノ ヨーニ
 セーゼント クギリオ ミセテ トーク ヒロガル、コ
 ードワ サンビヤクメートルオ クダツテ、ゲカイガ テ
 ニ トレソニー ナツタ、トーカイドーノ マツナミキガ
 ミエル、ドーロガ ジューモンジニ マジワル、ジュー
 ジロオ チューシンニ シテ、ココ カシコニ ソンラクヤ
 マチガ テンザイスル、テツドーガ ミエル、デンシヤ
 ガ ハシル、ジドーシヤガ トブ、ヒトカダガ ウゴク、
 フタタビ ウミエ デタ、ミギテニ チッコーガ アリ

○「くぎりを見せて」を別々にいふ時、アクセントは、クギリオ ミセテ となる。

○「こゝかしこ」を別々にいふ時、アクセントは、ココ カシコ となる。

キセンガ スーセキ カカツテイル、ナゴヤダト オモ
 ートタン、プロベラガ トマツテ、アトワ クーチュー
 カツソーデ アル、ダイチガ ミルミル モリアガツテ、
 キワ カルク チジョーオ オドリナガラ スベル、ジュー
 ージ サンジュー ゴフンデ アル、
 ナゴヤハ スツカリ クモツテ イタ、キセンガ スー
 セキ ミエルダケデ、シガイワ ノゾムベクモ ナイ、ダ
 イチオ フミシメテ アルイテ ミル、ミミワ マダ ガ
 ンガン ナツテ イル、ワタクシノ リンセキニ ノツテ
 イタ グンジンサント ハナシアツテ ミタガ、ハツキ
 リト ツージナイ、ツンポドーシノ ヨーニ ヤタラニ
 オーゴエオ ハッスルダケダ、
 ジューイチジ、マタ、キジョーノ ヒトト ナル、ナガ
 イ カツソーノ ノチ リルクスルト、ヤガテ ホーコー

○「大地が見る／＼盛上つて」は、稍強めるがよい。

○「尊同志」を別々にいふ時、アクセントは、ツンポ ドーシ となる。

ガ キマツテ、ヒダリニ イセワンガ ハルカニ ツズク、
 ミギテニワ オーキナ カワジリガ イクツ、
 ヨツカイチオ スギテ、ヘーヤカラ シダイニ サンチ
 ニ ウツル、コードケーワ エンリヨ ナク ノボツテ、
 マタモ センメートルオ トツバ スル、キヤツカニワ
 スズカサンミヤクガ ウネリ ハジメタ、トタンニ キタ
 イガ ストント オチル、ワタクシワ オモワズ マエノ
 イスニ ツカマツタ、マタ ストント オチル、エヤボ
 ケツトダナト オモ、トナリオ ミルト グンジンサン
 ガ エガオデ ウナズク、ミギテニ トーク ビワコラシ
 ーモノガ ミエタ、
 サンチワ ナオ シバラク ツズイタ、
 ジューイチジ ニジュー サンブン、ヒダリニ ヤヤ
 トーク オーキー トシオ ノズンダ、グンジンサンワ

○「遠慮なく」を別々にいふ時、アクセントはエンリヨナク となる。
 ○「山脈」は單獨には、サンミヤクと平板式にスル。

○「隣を見ると」は、トナリオ ミルトでもよ

チズオ サシテ、ソレガ ナラデ アル コトオ シメシ
 テ クレル、ヤマトヘーヤガ エノ ヨーニ ウツクシク
 カスンデ イタ、
 イコマヤマノ イタダキオ カスメナガラ スギルト、
 マエワ イチボ、ノヘーヤダ、デンボノ アイダニ
 イクジョーノ ドーロガ タテニ ヨコニ ツズク、アオ
 ゴラノ スエニ スミノ ヨーナ タモ、ソレワ オーサ
 カノ オビタダシー ケムリデ アツタ、
 ツイニ オーサカガ キタ、イチメンワ イエノ ウミ
 デ アル、コードガ グンゲン オチテ、マチマチガ ハツ
 キリ ミエル、ミゾノ ヨーナ ガイロオ キニクツ
 ソーニ ジドーシヤガ ハシツテ イル、ホリガ アル、
 タクサンナ フネダ、イッタイ ドノヘン ダロー、テン
 シュカクワト オモ、シユンカン、ナガイ カダシガ

○「それが奈良である」は、それがの次で一寸
 きるがよい。
 ○「繪のやうに」と續けていふ時、ヨーニの
 アクセントはあまり高くない。

○「疊のやうな」を別々にいふ時、アクセント
 は、スミノ ヨーナ となる。

〔参考〕
 スミ(疊・炭・濟)
 スミ(隅)
 ウミ(海)
 ウミ(塵)

○「みぞ」のアクセントは單獨には、ミゾ(平
 板式)である。
 ○「たくさん」のアクセントは、次のやうに、
 使ひ方によつて變る。
 たくさんな船 タクサンナ
 たくさんあります タクサン
 もうたくさんです モー タクサン
 〔参考〕

スギタ、テンノージ コーエンデ アツタ、
 キワ シガイオ ニシエ ツキヌケテ、トートー ウミ
 エ デタ、ミナトノ コーケーガ ナナメニ ウキアガッ
 テ、メニ エージタ トキワ、モー ホーコーオ テンジ
 テ ウミ カラ ヒコージョーエ スベリコム ヨーニク
 ダツタ、ジューイチジ サンジュー シテフンデ アツタ、
 ヒロイ ヒコージョーニ オリテ、ハゴロモオ ウシナ
 ヲタ テンニョノ ヨーニ トボトボト アルク、キケバ
 グンジンサンワ キョーゴゴ フクオカエ トビ、ア
 シタワ サラニ タイワンエ トブノダ ソーダ、ノルマ
 デワ イクラカ ファンモ アツタ ヒコーキガ、コーモ
 ユカイデ アンゼンダト シルト、ワタクシワ ツクズ
 ク コノ グンジンサンガ ウラヤマシクテ ナラナカッ
 タ、

カダン(花壇)
 カダン(果斷)
 ○「天王寺公園」を別々にいふ時、アクセント
 は、テンノージ コーエンとなる。

○「映じた時は」を別々にいふ時、アクセント
 は、エージタ トキワとなる。

指導概要

(一) 教材

- (1) 第一次には読みを主として、文字語句の簡単な取扱をなし、航空路記入の地図或は立體模型地圖等と照合して行程の概略を読みとらせ、文意の概観をさせる。
- (2) 第二次は文意の深究を主として四時間ぐらゐを豫定し、第一時、東京から箱根越えまで、第二時、沼津から名古屋まで、第三時、名古屋から大阪までを、第一次に概観した文意をもととして深究する。語句は文に即した具體的意味を指導する。第四時には全體を綜合して、時間的経過、高度の變化、地上での觀察との違ひ等を纏め、飛行機の機能、地形と高度との關係等を、文を通して歸納させる。
- (3) 第三次では、主として表現を扱ひ、文字語句の應用的、發展的修練を圖る。
- (4) 然、筆、示し、玩、濁、隻、離、は新出文字であり、片、流、川原、弱、移、束、隣、志、脚、女は讀替文字である。第一、二、三次を通じて、幾回かに分けて指導する。
- (5) 語句としては、速力が増加する、盡きて、下界、整然、ふるひつきたい程、模型圖、遠望がきかない、紙片、同乗者、筆談、高度計、偉大な、ひれ伏し、汀、點在、濁流、あつけない、川原よもぎ、貧弱、移動、束の間、しり目にかけて、道中すごろく、方眼紙、村落、築港、途端、空中滑走、望むべくもない、離陸、突破、エヤボケット、瞬間等相當むづかしい語句が澤山ある。文に即して具體的な意味を指導しなければならない。

(二) 挿畫

- (1) 第一圖。羽田飛行場と旅客飛行機。第二圖。箱根芦ノ湖。第三圖。本文百五十二頁終りの方に當る所。方眼紙

のやうに整然とした田圃を觀察させる。第四圖。鈴鹿山脈中の連峰である。こんな地形の所にエヤポケットが多い。航空にとつては難所の一つである。

(三) 準備

掛圖。航空路入りの地圖。立體模型圖。方眼紙。旅客飛行機の寫眞。模型等。

参考

(一) 羽田飛行場から福岡までの定期旅客輸送の日本航空輸送株式會社の旅客機は、客六人、操縦士、機關士各一人都合八人乗である。毎日午前九時と午後一時三十分との二回羽田を出る。

航空路は、羽田から平塚、小田原、芦ノ湖の南を過ぎ沼津から駿河灣を越えて清水、静岡、濱松に出で、豊橋を経て名古屋郊外に着陸、約十分間休憩の後、伊勢灣を渡つて、龜山、更に鈴鹿山脈を越して奈良の北を飛び、大阪の西南郊に着陸する。航空路は更に西に延びて大阪灣を横ぎつて和田岬から明石へ、播磨灘を飛んで赤穂、岡山、福山、尾道の上空を廣島へ、更に海上を大野へ、岩國を経て直線に宇部へ、周防灘を渡つて福岡縣行橋へ、これから飯塚の北を迂回して太刀洗から福岡に入る。

貨金は、東京大阪間參拾圓、東京福岡間六拾五圓である。

(二) エヤポケット。地形が凹形をして、冷却した空氣が下降し、その部分に集積する時その區域をエヤポケットといふ。航空用語としては、上空に於て局部的に氣象條件が急變する場所をいひ、航空機はこの部分で急激に沈降し安定を失ひ危険を生ずる。

第二十六 もくせいの花

一 要旨

梢に百舌鳥を呼んで、清澄の秋を高くかをるもくせいの香に切々と思ひ出づる人の世の姿、懐かしい花を愛づるゆかしい心、こぼれ匂ふまでこの詩に盛られた師を慕ふ情愛の深さを讀みとらせ、併せて、五聯四節定律の落ちつきある韻律の美を味はせる。

二 指導観

(一) 三節四節はもとより、第一節既に「今年も咲きぬ」といつたところ、更に第二節「ゆかしきかをり」とひとかされた裏に、送つた師を慕ふ教へ子の綿々たる情が、ほどばしり出さうに潜んでゐる。かうした經驗をもつ兒童には勿論のこと、經驗のない子供にもこの純情さは深く心を動かすものがあるであらう。作者を強ひて五年の兒童と想定するにはあまりに整ひ過ぎた形であるが、情感をもとにして味讀させることによつて、全篇に一貫して流れる師の君を慕ふ至情を讀みとらせなければならぬ。

(二) 「さつきまつはな橋の香をかげば、昔の人の袖の香ぞする」といひ、「年々歳々花相似。歳々年々人不同」といふ。花を見、花の香をきいて別れた人をなつかしむといふのは、半可通の大人にとつてこそ用ひふるされた「趣向」のやうにも思はれようが、「學校の道すがら、見つゝ行く」といふのを聞いても、敢へて、もくせいの花の香を

まつまでもなく、絶えず慕つた心持はそのまま、素直に受取れる。その日頃の氣持が、たま／＼、強い、追憶をそゝるやうな、もくせいのかをりに出遭つた時、しかも、その花が、「去年の今頃」師を送つた時の情景とそつくりには咲き匂ふものであつた時、子供ながらも自然にこの詠歌がもれたのはまことに美しい人情の表れといふべきであらう。

(三) 詩の意は、(一)毎日の學校の行き遣りに、氣にとめて見ながら通るこの家の庭に、今年ももくせいの花が咲いた (二)黄色な花のこぼれるやうなゆかしいかをりをよ (三)なつかしい師の君を送つた去年の今頃も、ちやうどこの花のま盛りであつたよ (四)澄んだ高い秋の空、高いもくせいの香、その香にもたぐふべきゆかしき師の君が、しみ／＼なつかしまれる、といふのである。

(四) 型は、十五七七の格調である。繊細な感傷的な内容が盛られてある割に、輕薄な淺浮な感じを受けず、口調に驅られて浮調子に讀み過し難いこの詩型の美を味はせたい。

三期讀

本文

ダイ ニジユー ロク、モクセーノ ハナ、
 ガツコーノ ミチスガラ、
 ミツツ ユク、
 コノ イエノ ニワ、

朗讀上の注意

○全文落付いてゆつくりと讀むがよい。

【参考】
 ニワ(庭)
 ニワ(二羽)

モクセーワ
 コトシモ サキヌ、

コンジキニ サキコボレ、
 エダ エダニ、

コボレ ニオイテ、
 モクセーノ
 ユカシキ カオリ、

ナツカシキ シノキミオ、
 ミオクリシ、
 コゾノ イマゴロ、
 コノ ハナノ
 サカリ ナリケリ、

第二十六 もくせいの花

【参考】
 サキ(咲き)
 サキ(裂き)

【参考】
 シ(師・四・氏・資・死)
 シ(詩)

○「盛」は單獨には平板式にいふ。

アキノ ソラ、カモ タカク、
モクセーワ、

コトシモ サキテ、

シノ キミオ

シミジミ オモ、

〔参考〕
アキ(秋)
アキ(徳)
アキ(明)

指導概要

(一) 教材

- (1) 第一次には讀みを主とし、道すがら、咲きこぼれ、こぼれ匂ひて、ゆかしき、なつかしき、なりけり等の語句を具體化し、直觀的に取扱ひ、詩の意を把らせ文意の概觀をさせる。
- (2) 第二次には、文意をもとにして、節を追うて高潮する情趣情感を讀み味はせる。
- (3) 第三次では、道すがら、見つゝ行く、今年も、こぼれ匂ひて、ゆかしき等、内容と一如になつた措辭の妙から詩型の落つた感じ等まで鑑賞させる。

(二) 準備

もくせいの木のない所ではもくせいの新しい枝二三枝。

第二十七 橋 中 佐

一 要 旨

壯烈鬼神を泣かしむる橋中佐の奮戦の場面を讀み取らせ、軍神と仰がれる中佐の誠忠無比、しかも部下を思ふ軍人精神に感奮せしめ、報國盡忠の心を養ふ。

二 指導観

(一) 橋中佐は、海軍に於ける廣瀬中佐と共に日露戦争に於ける雙璧として、その壯烈無比な誠忠の精神を永く謳はれるのであつて、軍神橋中佐の奮戦の場面を描出して壯烈な精神をあらはしたのが本課の主眼である。

(二) 本課は一聯の物語であるが、しかし敘述の順序は略、次のやうになつてゐる。
(1) 中佐の奮戦と高地の占領 (2) 敵の逆襲と中佐の負傷並に奮戦 (3) 中佐の誠忠 (4) 平時に於ける中佐の人となり、而して全篇躍如として中佐の精神をみる事が出来る。即ち、「橋中佐、眞先に立ちて敵中にをどり入り、忽ち三人を斬倒す。敵の彈丸、雨あられの如し。中佐、すでに右手に傷を受けたれども、左手に軍刀を振り、部下の兵士をばげまはげまし、遂に日章旗を山上に立つ。」の中には、如何に中佐が奮戦したか、率先してその勇を部下に示したかをうかゞふことが出来るし、「中佐は大音に、「一度國旗を立てたる此の高地、全滅すとも敵の手に渡すな。一步も退くな。」と叫びて、敵を撃退すること數度、中佐すでに第二彈を左手に、更に第三彈を腹

部に受けたれども、少しもひるむ色なく、なほ奮戦を續けたり。」の中には、その壯烈な精神を讀みとることが出来る。又「残念なり。多數の部下を失ひて占領したる陣地を取返さるゝか。」といふ言葉、及び更に形を正して「今日、我が皇太子殿下の生まれ給ひし日なり。此のめでたき日に一身を君國に捧ぐるは、まことに軍人の本望なり。」といふ言葉の中には、部下を思ひ、且つ誠忠の精神が烈々として輝いてゐるのであつて、これ等の精神をよく讀み取らせることが大切である。

(三) 文は、戦記文として、如何にもきび／＼と張り切つて、無駄がなく勇ましく書かれてゐる。次の言葉をよく味はすべきであらう。

(イ) 我が兵これを物ともせず、敵陣目がけて突撃すれば、敵は劍の林を以て我を迎ふ。(ロ) 敵の彈丸雨あられの如し。(ハ) いかにか心は堅くとも、身は鐵石にあらざれば、砲丸に倒るゝ兵士數知れず。(ニ) ほつと一息つく折から、飛來る一彈、又も中佐の胸を貫き、軍曹の胸をも貫く。二人は、一度に打倒されて氣を失へり。

三朗讀

本文

160

ダイ ニジュー シチ、タチバナ チューサ。

161

テキワ ヤマニ ヨリテ ジンチオ カタメ、サカンニ
ダンガンオ ウチダス。ワガ ヘー コレオ モノトモ

朗讀上の注意

〔参考〕
ジンチ(陣地・人智)

セズ、テキジン メガケテ トツダキ スレバ、テキワ
ツルギノ ハヤシオ モツテ ワレオ ムコー、タチバナ
チューサ マツサキニ タチテ テキチューニ オドリイ
リ、タチマチ サンニンオ キリタオス。
テキノ ダンガン アメ アラレノ ゴトシ、チューサ
ステニ ミギテニ キズオ ウケタレドモ、ヒダリテニ
グントーオ フルイテ プカノ ヘーシオ ハダマシ
ハダマシ、ツイニ ニツシヨーキオ サンジヨーニ タツ、
トキワ メージ サンジュー シチネン、ハチガツ サン
ジューイチニチ、アサヒノ イマダ ノボラザル コロ
ナリキ。

テキワ コレオ ミテ、サンポー ヨリ サカンニ
イホーオ ウチカク、イカニ ココロワ カタクトモ、ミ
ワ テツセキニ アラザレバ、ホーガンニ タオルル

○「劍の林」を別々にいふ時、アクセントは、
ツルギノ ハヤシとなる。
○「眞先に立ちて」を別々にいふ時、アクセ
ントは、マツサキニ タチテとなる。
〔参考〕
チキチュー(敵中・適中・的中)
○「あられの如し」を別々にいふ時、アクセ
ントは、アラレノ ゴトシとなる。
○「中佐」は平板にチューサといつてもよい。

○「山上に立つ」を別々にいふ時、アクセント
は、サンジヨーニ タツとなる。
○「上らざる頃なりき」を續けていふ時、下の
二語のアクセントはあまり高くならない。
○「これを見て」を別々にいふ時、アクセント
は、コレオ ミテとなる。
〔参考〕
サンポー(三方)
サンポー(参謀・三寶)
ミ(身・實・已)
ミ(箕)
ホーガン(砲丸・包舎)
ホーガン(判官)

トサケビテ、テキオ、ゲキタイスル、コト、スード、チ
ニ、サ、スデニ、ダイ、ニ、ダンオ、ヒダリテニ、サラニ
ダイ、サンダンオ、フクブニ、ウケタレドモ、スコシモ
ヒルム、イロ、ナク、ナオ、フンセンオ、ツズケタリ、タ
チマチ、ホーダンノ、イチハヘン、ソノ、コシニ、アタリ、
チニ、サワ、ドート、ソノ、バニ、タオレタリ、

カタワラニ、アリシ、ウチダグンソワ、イツギ、チニ
サオ、ザンゴノ、ウチニ、タスケイレテ、カイホース、
タタカイ、マスマス、ハダシ、チニ、サ、メオ、ミハリテ、

○「すかさず」を早口にいつて、次の語の「更」に「が」をそれに續くやうにいふがよい。

○「國旗を立てたる」を別々にいふ時、アクセントは、コツキオ、ダテタルとなる。

〔参考〕

コツキ(國旗)

コツキ(克己)

○「全滅」と單獨にいふ時は平板式である。

コト(高地・耕地・高知)

グントーオ、ツエニ、タチアガラントス、グンソー、チニ
サオ、セオイ、ダンガンノ、シタオ、クグリテ、ケワシ
キ、ガケオ、カケクダル、

ホット、ヒトイキ、ツク、オリカラ、トビクル、イチダ
ン、マタモ、チニ、サノ、ムネオ、ツラヌキ、グンソーノ
ムネオモ、ツラヌク、フタリワ、イチドニ、ウチタオサ
レテ、キオ、ウシナエリ、

フク、アサカゼニ、チニ、サモ、グンソーモ、フトワ
レニ、カエレリ、グンソー、カタワラニ、アリシ、フシ
ー、ヘート、トモニ、チニ、サオ、イタワル、オリカラ、テ
キノ、トツゲキノ、コエ、サカンニ、キコユ、ジンチワ
フタタビ、テキニ、トリカエサルニ、アラズヤ、チニ、
サワ、イエリ、

ザン、ネンナリ、タスーノ、ブカオ、ウシナイテ、センリ

○「かたはらは、カタワラと平板にいつてもよい。

〔参考〕

カイホー(介抱)

カイホー(解放・快方)

○「軍曹中佐を背負ひ」の所は、いふ迄もなく軍曹が中佐を背負つたのであるから「軍曹」の次で一寸切つて「中佐を背負ひ」を續けていつた方がよい。

○「かけ下る」は速くいつて次の休止を少し長くする。

〔参考〕

イチド(副詞) イチドニ(副詞)

イチド(数詞)

キ(氣・黃)

キ(木・奇)

フク(拭く・葺く)

フク(吹く・服・福・副)

〔参考〕

サカン(盛・左官)

サカン(佐官)

○「多数の」から「取返さるゝか」迄は續けて讀んだ方がよい。

〔参考〕

センリョー(占領)

センリョー(染料)

ヨ一シタル ジンチオ トリカエサルルカ、
 ト、サラニ カタチオ タダシテ イエリ、
 キョーワ、ワガ コータイシデンカノ ンマレ タマイ
 シ ヒナリ、コノ メデタキ ヒニ イツシンオ
 クンコクニ ササグルワ、マコトニ グンジンノ ホン
 モーナリ、
 ト シズカニ リョーガンオ トジツツ レンタイチョー、
 ショーヘーノ アンビオ ツギツギニ タズネ、ホトンド
 オノレノ クツトオ シラザル モノノ ゴトシ、
 チューサノ ゼンシンワ シダイニ ヒエヌ、ヒモク
 レント スル コロ、
 グントーワ アルカ、
 ノ イチゴオ サイゴト シテ、ツイニ イキ タエタリ、
 タチバナチューサワ、ヘーゼー ココロザシ カタク、

○「今日は」から「本望なり」迄は嚴肅莊重な氣分があらはれるやうにゆつくりいはねばならない。

〔参考〕

イフシン(一身)

イツシン(一心)

○「本望」は ホンモーともいふ。

〔参考〕

リョーガン(兩眼・兩岸)

ショーヘー(將兵)

ショーヘー(招聘)

○「知らざるもの如し」は強くいひ切るやうに言つた方がよい。

○「中佐の全身は次第に冷えぬ」以下「遂に息絶えたり」までは此の場の側々として胸に迫る氣持を表現する爲に、靜かな調子でゆつくりといふがよい。

〔参考〕

イキ(息・意氣・城・壹岐)

イキ(粹・行)

カミ(上・神・加味)

カミ(紙・美)

ユ一キニ ミチタル グンジンニシテ、カミオ オモイ
 プカオ アワレム ココロ フカカリキ、コノ ヘーゼー
 ノ オコナイ アリテ、コノ ソーレツナル シオト
 グ、チューサガ タスーノ センシシャチュー、トクニ
 グンシント アガメラルルモ ウベナリト ユーベシ、

○「壯烈なる」を別々にいふ時、アクセントはソーレツナルとなる。

指導概要

(一) 教材

- (1) 文は、戦記文として、壯烈勁適な筆致によつて書かれてゐる。最も興味深く讀まれる教材であらう。
- (2) 第一次は、主として全文の讀み、文字語句を取扱ひ、文の精神を概観させることが大切である。
 この場合文の背景となつてゐる日露戦争、並に直接この教材に関係ある首山堡の戦などについて概説すること。
 が文理解の上に必要であらう。橋中佐について、その人となり経歴などを話すことも大切である。
- (3) 第二次は各節につき、戦場の光景、中佐の忠烈な働き、及びその心持などを捉へさせる。
 (イ) 我が兵これを物ともせず、敵陣目がけて突撃すれば、敵は劍の林を以て我を迎ふ。橋中佐、眞先に立ちて敵中にをどり入り、忽ち三人を斬倒す。(ロ)敵の彈丸、雨あられの如し。中佐すでに右手に傷を受けたれども、左手に軍刀を振ひて、部下の兵士をばげまはげまし、遂に日章旗を山上に立つ。(ハ)いかに心は堅くとも、身

は鐵石にあらざれば、砲丸に倒るゝ兵士數知れず。(ニ)一度國旗を立てたる此の高地、全滅すとも敵の手に渡すな。一步も退くな。(三)戦ますく烈し。中佐目を見張りて、軍刀を杖に立上らんとす。(ホ)残念なり。多數の部下を失ひて占領したる陣地を取返さるゝか。(ハ)今日は、我が皇太子殿下の生まれ給ひし日なり。此のめでたき日に一身を君國に捧ぐるはまことに軍人の本望なり。(ニ)靜かに兩眼を閉ぢつゝ、聯隊長・將兵の安否を次に尋ね、ほとんどおのれの苦痛を知らざるもの如し。(ト)橋中佐は、平生志堅く、勇氣に満ちたる軍人にして、上を思ひ部下をあはれむ心深かりき。

(4) 第三次は、第二次に於ける精査を基として文に漲る精神氣魄を、その言葉々々の上に捉へさせ、文意を確認させる。

(5) 卷八・第二十二の廣瀬中佐と十分聯關的に取扱ふことが大切である。いづれも壯烈鬼神を泣かしめ、軍神として永くほめ稱へられてゐる。

(二) 挿畫

百六十二頁の挿繪は首山堡の戦に、橋中佐が彈丸雨飛の中を眞先に立つて敵中にをどり入るところで、右手に軍刀をふりかざしてゐるのが中佐である。

(三) 準備

日露戦争地圖並に寫眞掛圖等。

三 參考

(一) 橋中佐は名を周太といひ、長崎縣南高來郡千々石に生れた。明治二十年陸軍士官學校卒業後、東宮武官、戸山

學校教育、地方幼年學校長を経て同三十七年四月第二軍に従ひ戦地に向ひ、八月三十一日首山堡の戦に壯烈な戦死を遂げた。時に年四十歳、其後中佐の生地千々石にはその銅像が建てられ、千々石灣は一に橋灣と呼ばれるやうになつた。

(二) 首山堡の戦。首山堡は遼陽の南西約六軒に在る丘陵で、高さは百米に満たないが、平野の中に聳えて人目を引き易く且つその麓から東南に向つて小丘が連続してゐるので要害堅固である。遼陽戦の時は西比利亞第一軍團が首山堡を守り、第二軍團がこれに續く小丘に據り、スタケルベルグ將軍がその指揮にあつてゐた。我が軍は八月三十日からこの高地一帯の争奪戦に移つたのである。

第二十八 國語の力

一 要旨

國語は、國民の魂の宿るところであり、國初以來我等の先祖からうけついで來た國民的感情精神のとけこんだものであつて、國民をつなぎ、國民を團結させ、やがて國力の發展を招來すべき偉大な力である所以をさとらせ、且つ議論文に對する讀解の修練を行ふ。

二 指導観

(一) 「言靈の幸はふ國」といはれた我が國は、古來靈妙な言葉の發展を遂げて來たのであつて、その一つ一つの言葉の中に、我等の祖先の思想感情が織り込まれてゐることは論を俟たない。隨つて言葉、即ち國語は、國民精神のあらはれであり、國民精神を建設して行く根源となるものであつて、その力の偉大で尊いことを覺らせるのが本課の精神である。

(二) 本課は最初に、子守唄、君が代等によつて、國民の腦裏に深くしみ込んだ感激の心持をあらはし、その心持を呼び醒すのが國語の尊い力である所以を述べてゐる。更に日常國語を除いて我々の生活なく、國語こそ我々を育て、我々を教へてくれる大恩人である所以を説き、又外國にあつて、國語によつてしみくゝとありがたさを感じ愛國の精神が湧き起つて來る心持を書き、而して國語の尊さ、力、尊重すべき所以を説いてゐる。

(三) 「國語を尊べ、國語を愛せよ。國語こそは、國民の魂の宿る所である。」といふ結語が、この課の精神であり、その精神をしみくゝと心に覺らせるために、さまざまの場合の國語の尊さを書いたのが、この課の表現の形式である。國語を愛護すべき精神を覺らせると共に、その表現形式をも理解させることが大切である。

三 朗讀

本文

166 頁

ダイ ニジニユー ハチ、コクゴノ チカラ、
 ネンネン コロリヨ オコロリヨ、
 ボーヤワ ヨイコダ ネンネシナ、
 ダレデモ、オサナイ トキ ハハヤソボニ ダカレテ、
 コーシタ ウタオ キキナガラ ココロヨイ ユメジニ
 ハイッタ コトオ、オモイ ダステ アロー、コノ ヤサ
 シー ウタニ ウタワレテ イル コトバ コソ、ワガ
 ナツカシー コクゴデ アル、
 キミガヨワ、チヨニ ヤチヨニ、サザレ イシノ

朗讀上の注意

○全文、ゆつくりと、しかも一語一語を力強く讀まねばならない。
 ○初めの歌は、靜かにやさしく、唄ふやうにいふがよい。

○「君が代」の歌は靜かに、ゆつくりと讀むがよい。

イワオトナリテ、コケノ ムス マデ、
 コノ コツカオ ホーシヨースル トキ、ワレワレ ニ
 ヲボンジンワ オモワズ エリオ タダシテ、サカエマス
 ワガ コーシツノ バンザイオ、ココロカラ イノリ
 タテマツル、コノ コツカニ ウタワレテ イル コトバ
 モ、マタ、ワガ トートイ コクゴニ ホカナラナイ、
 ワレワレガ、マイニチ ハナシタリ キータリ ヨンダ
 リ カイタリスル コトバガ、ワレワレノ コクゴデ ア
 ル、ワレワレワ、イチニチ タリトモ コクゴノ チカラ
 オ カリズニ セーカツスル ヒワ ナイ、ワレワレワ、
 コクゴニ ヨツテ ハナシタリ カンガエタリ モノゴト
 オ マナダリシテ ニッポンジント ナルノデ アル、
 コクゴソワ マコトニ、ワレワレオ ソダテ、ワレワレ
 オ オシエテクレル ダイオンジンナノデ アル、

○「イワオトナリテ」を別々にいふ時のアクセントは、イワオト ナリテとなる。
 (参考)
 コツカ(国歌)
 コツカ(國家)
 コツキ(國旗)
 コツキ(克己)

(参考)
 ハナス(話す・離す・放す)

○「大恩人なのである」と続けていふ時、アルのアクセントは、あまり高くない。

コノ ヨーニ タイセツナ コクゴデ アルノニ、トモス
 レバ コクゴノ オンオ ワキマエズ、ナカニワ コクゴ
 ト ユー コトサエモ カンガエナイ ヒトガ アル、シカ
 シ、イチド ガイコクノ チオ フンデ コトバノ ツー
 ジナイ トコロエ イクト、ダレデモ、コクゴノ アリガ
 タサオ シミジミト カンズル、コーユー トコロデ タ
 マタマ ナツカシー ニッポンゴオ キクト、マルデ ジ
 ゴクデ ホトケニ アツタ ココチガシ、アイコクノ コ
 コロガ イズミノ ヨーニ ワキ オコルノオ カンズル
 ノデ アル、アメリカ ガツシニューコクヤ ブラジル ナ
 ドニ スンデ イル ニッポンジンワ、ニッポンゴ ガツ
 コーオ タテテ、ジブンノ コドモたちニ コクゴオ オ
 シエテ イル、ニッポンジンワ、ニッポンゴニ ヨツテ
 キョーイク サレナケレバ ナラナイカラデ アル、

○「國語」と單獨にいふ時、アクセントは平板式である。

(参考)
 アリガタサ(ありがたさ)
 アリガト(ありがたう)
 アリガタミ(ありがたみ)

○「佛」は ホトケ といふ人もある。

○「泉」は單獨にいへばアクセントは平板式である。

○「わき起るのを」を別々にいふ時、アクセントは、ワキ オコルノオ となる。

○「學校」は單獨には、ガッコウ(平板式)である。
 ○上から続けていふ時、アルのアクセントはあまり高くない。

ワガクニワ、カミヨ コノカタ バンセー イツケーノ
 テンノーオ イタダキ、セカイニ タグイナキ コクタイ
 オ ナシテ、コンニチニ ススンデ キタノデ アルガ、
 ワガ コクゴモ マタ、コクシヨ イライ ケーゾクシテ
 ゲンザイニ オヨンデ イル、ダカラ ワガ コクゴニ
 ワ、ソセン イライノ カンジョー セーシンガ トケコン
 デオリ、ソーシテ ソレガ マタ コンニチノ ワレワレ
 オ ムスビ ツケテ、コクミン トシテ イツシン イツ
 タイノ ヨーニ ナラシメテ イルノデ アル、モシ コ
 クゴノ チカラニ ヨラナカッタラ、ワレワレノ ココロ
 ワ ドンナニ バラバラニ ナル コトデ アロー、シテ
 ミルト、イツタン カンキユー アル トキ、クニオ ア
 ダテ コクナンニ オモムクノモ、ココクノ ヨロコビ
 ニ、クニオ アダテ バンザイオ トナエルノモ、ヒトツ

○「我が國は……」この一節は、重々しく讀むがよい。

○「神代」は、カミヨ ともいふ。

○「世界」は、セカイ ともいふ。

〔参考〕
セカイイチ(世界一)
セカイジユー(世界中)
セカイテキ(世界的)

〔参考〕
カンジヨ(感情)
カンジヨ(勤定)

○「コクナン」は、コクナン(平板式)といつてもよい。

○「皇國・廣告」共に、ココク と平板式にす。

指導概要

(一) 教材

- (1) 従來の敘述的文から議論文へ進んでゐるので、内容・表現共に抽象化せられたところが多く、稍難解な點があるから、十分思想的に讀解する訓練をしなければならぬ。
- (2) 第一次には、主として全文の讀み及び文字語句の取扱ひをなし、最後の「國語を尊べ、國語を愛せよ。國語こそは、國民の魂の宿る所である。」といふ文意の大略を掴ませることが大切である。
- (3) 第二次は更に進んで、文意に向つて如何に文が構成せられてゐるか、即ち文の機構から、如何に文意が導き出

ニワ、コクゴノ チカラガ アズカッタ イルト イワナ
 ケレバ ナラナイ、

コクゴワ コーユー フーニ、コツカ コクミント ハ
 ナス コトノ デキナイ モノデ アル、コクゴオ ワス
 レタ コクミンワ、コクミンデ ナイト サエ イワレ
 テ イル、

コクゴオ トートベ、コクゴオ アイセヨ、コクゴコン
 ワ、コクミンノ タマシーノ ヤドル トコロデ アル、

○上から讀けていふ時、ナラナイ のアクセントはあまり高くない。

○終りの二行の文は、ことに力強く、しつかりと讀むべきである。

されてゐるかについて研究を進め、各節に於ける主要語句を捉へさせなければならない。

(イ) 我がなつかしい國語である。(ロ)我が尊い國語に外ならない。(ハ)國語こそは、まことに我々を育て、我々を教へてくれる大恩人なのである。(ニ)愛國の心が泉のやうにわき起るのを感じるのである。(ホ)我が國語には祖先以來の感情精神がとけこんでをり、さうして、それがまた今日の我々を結び附けて、國民として一身一體のやうにならしめてゐるのである。(ヘ)國語を尊べ、國語を愛せよ。國語こそは、國民の魂の宿る所である。

(4) 第三次は更に掘り下げて一つ一つの言葉に宿る精神の力、並にその力が綜合して述べられてゐる最後の結語を深く味讀させる。

(5) 子守唄並に君が代の、一はなつかしくやさしい感情を、一は壯嚴嚴肅の心持並にその意味をよく味はせる。

三 参 考

ことだま

古來我が國の言葉の靈妙な力を尊んでいつたことばで、我が國を、ことだまのさきはふ國といつてゐる。

萬葉集には「そらみつやまとの國は、すべ神のいつくしき國、ことだまのさきはふくにと、語りつぎいひつがひけり。」とあり、又同じ萬葉集に「しき島のやまとの國は、ことだまのたすくる國ぞ、まさきくありこそ。」ともうたはれてゐる。

讀本指導と朗讀法 卷九 (終り)

尋常科用

讀本指導と朗讀法

卷九

昭和十二年四月五日印刷
昭和十二年四月十日發行

【定價一圓五拾錢】

東京朗讀研究会

代表者

著作者 藤野重次郎

東京市日本橋區通三丁目一番地

發行者 河出孝雄

東京市京橋區錦町一ノ七番地

印刷所 福神製本印刷所

東京・日本橋・通三丁目

發行所 成美堂

電話 東京一七一九番

電話 日本橋二七四八番

電話 日本橋二七七七番





